

策定年月	令和5年 月
見直し年月	

麦・大豆国産化プラン

産地名：美幌町

(作成主体：株式会社一戸農場)

1. 麦・大豆生産の現状と課題及び課題解決に向けた取組方針

大豆生産の現状といたしましては、直近2年の実績といたしましては、品種名〇〇を有機栽培にて作付け。
令和3年産面積〇aに対し収量〇kgの出荷実績10a当たり〇kg
令和4年産面積〇aに対し収量〇kgの出荷実績10a当たり〇kg

大豆生産の課題といたしましては、R3年は干ばつ、R4年は多雨と天候が極端な2年ですが、収量の点から見ても降雨による湿害が大豆の生産にとってかなりの影響を及ぼしていると考えられます。

大豆の安定生産には湿害対策にあると考えております。

現状の対策として行っているのは、〇〇cmほど深耕のできるサブソイラーを〇〇馬力相当のトラクターにて1回の深耕では負荷が掛かりすぎるため浅く、深く2回に分けて施工してから播種という流れで湿害対策を行っておりますが、結果としてR3年とR4年の収量の差から見ても十分な効果を得られていないと考えられます。

現状の〇〇cm深耕よりもさらに深い所に硬盤層あると考えておりそこまでの深耕をどのように行っていくのか考えていかなければ安定した作付けと面積の拡大は困難であると考えております。

また播種時期の美幌町の天候も年々不安定な傾向があり、適期播種につきましても現状の湿害対策の為の作業を2回行いながらの畑づくりは時間的余裕もありません。このような状況ですと現状の面積からの拡大は難しいと考えております。

連作障害対策といたしましては、堆肥、緑肥作物による有機物の補給、土質の改善に取り組んでおり目立つ連作障害などはありませんが、土質が粘土質の圃場が多く土の固さへの対策にはまだまだ時間を要すると考えております。

抱えている課題の解決に向けての方針としては、土づくりへの取り組みは今まで同様継続して行っていくのはもちろんですが、短時間で結果の出る取り組みではない為、合わせて現状よりも深く深耕し圃場の排水機能を上げる作業を適期播種に間に合うよう作業効率をあげて、天候に負けない安定した大豆の作付面積の拡大を行っていくことを方針として行います。

※ 麦・大豆生産における課題(湿害対策、適期播種、土づくり、連作障害対策等の必要性等)を具体的に記載すること。

※ 課題解決に向けて取り組む内容及び今後の生産拡大に向けた方針を具体的に記載すること。

2. 産地と実需者との連携方針

連携方針といたしましては、麦・大豆の国産有機化を目指す〇〇と有機農産物を専門に取り扱う卸業者〇〇の生産計画から消費までを一貫した事業を複数年契約(令和3年より株式会社一戸農場を含む〇〇で生産される大豆、小麦の全量を出荷する条件での設備等への共同出資、生産計画、出荷契約を共同で行う内容で年度毎に、価格、作付け内容を見直しをして継続する)に生産者として株式会社一戸農場も参加し計画をもとに生産していく事業を令和3年度より行っております。

株式会社一戸農場は、有機農産物を取り扱う〇〇と取引する生産法人の一つであります。株式会社一戸農場としては、〇〇ha全面積有機JAS認証取得していますが、全ての圃場で除草など人手のかかる作物はできません。手のかかる作物は〇〇haほどの作付けが限界であり残る〇〇haほどの圃場で機械管理でおおよそ完結できる麦・大豆の面積を増やしていく事で休閒緑肥では得られない収入をいただきながら輪作体系を維持できるという事もあり実需者と連携して、計画をもとに生産しています。

特に大豆は調味料や豆腐、納豆など加工品原料を輸入大豆から切り替えたいという業者の声も多いとのことで、面積の増加が望まれている作物という流れは、有機農産物の流れとしてもあるとのことなので、毎年面積の増加を期待されています。

特に〇〇の取引先である〇〇におきましては、MOA商事と連携して国産有機を広めていきたいというところから最終実需者でありながら生産者との連携も前向きにされているので、生産から消費までが繋がる連携体制が構築されています。

現状、株式会社一戸農場の大豆はR3年で〇〇キロ、R4年で約〇〇キロありますが、3年計画(令和4年産→令和7年産)での目標値として面積を〇〇ha出荷量を〇〇キロを目標にして取り組んでいきたいと考えております。

※ 産地と実需者については具体的な名称を記載すること。

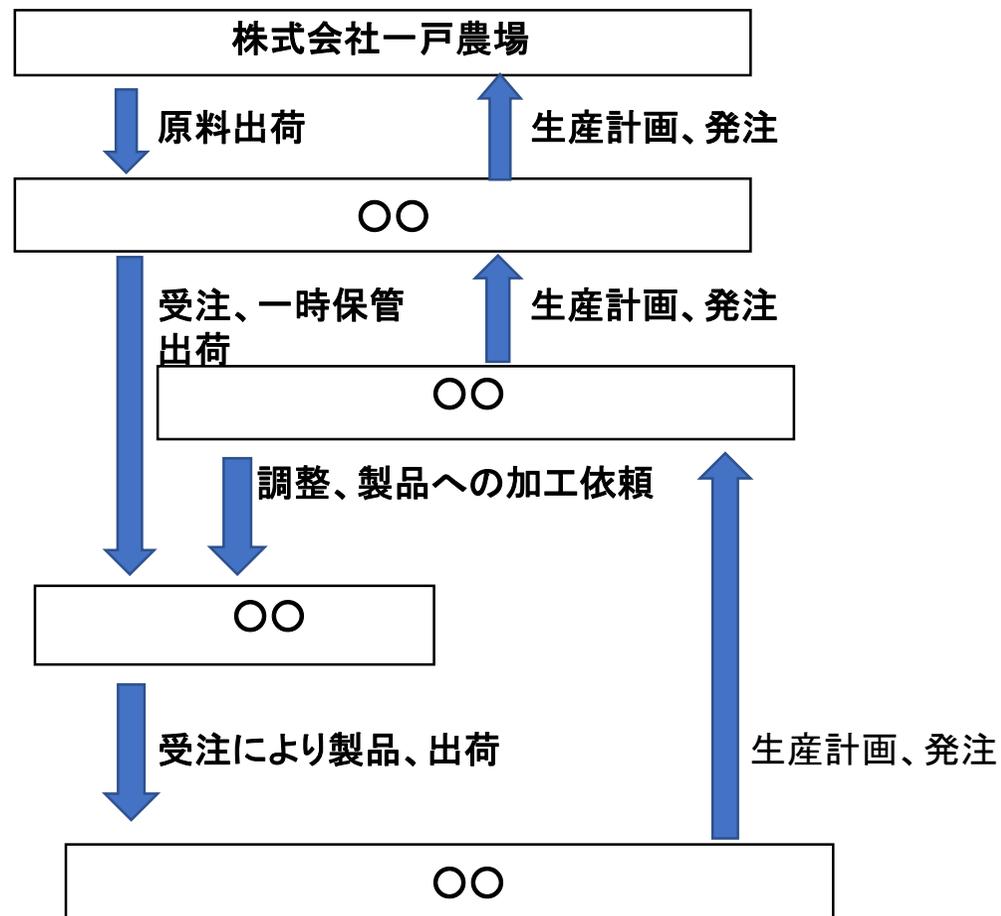
※ 麦の実需者は、麦を原料とした加工品等の製造を業とする者(製粉会社、製パン会社、製麺会社等)とする。

※ 大豆の実需者は、大豆を原料とした加工品等の製造を業とする者、大豆の販売を業とする者及びこれらの者が組織する法人その他の団体とする。

なお、販売を業とする者を実需者とする場合は、その者が販売する先(最終実需者)について、代表的な者の名称を記載すること。

※ 産地と実需者それぞれの国産麦・大豆取扱量の現状とおおむねの目標値を記載すること。

3. 麦・大豆の国産化に向けた推進体制及び各関係者の役割



※ 産地と実需者との連携について、図等を用いて明示すること。

※ 取組の中心となる農業者等を必ず位置付けること。